「ことば」のパワー

高松　正毅

「学生のボキャ貧危機的　私大生の19%〝中学生〟『授業成り立たぬ心配』(独立行政法人メディア教育開発センターの調査による)とするショッキングな新聞記事(2005年6月8日付毎日新聞)が出た。この調査結果は、母集団の取り方等に問題があり、内容そのものは鵜呑みにすべきものではない。しかし、この記事中に注目すべき記述が見える。それは、「『読む・書く・話す』といういわゆる『日本語力』は、語彙の豊富さから類推できる」とする一節である。

どうして総合的な能力であるはずの「日本語力」が、「語彙」の豊富さだけから判断可能なのであろうか。

1「ことば」とは何か

「ことば」とはコミュニケーション・ツール、すなわち意思の疎通・伝達のための道具であると、皆さんは思っているかもしれない。情報をやり取りするためにインタラクティヴ(双方向的)に働く媒体である。

しかし「ことば」の機能は、情報の「伝達」にはとどまらない。他に、時候の挨拶など、具体的な意味内容をさほど持たない「社交」機能や、独り言や叫声など、半ば無意識的な「表出・調整」機能もある。

そして「思考」機能。人は「ことば」を用いて考える。映像や旋律などで考えることもあるが、抽象的な概念の操作は「ことば」なしには成り立ち得ない。

2 知っているとは、「語」を知っていること!

ここでさらに問題としたいのは、「ことば」の持つ「認識」機能である。

知っているとは、物体が見えていることではない。何かがそこにあると認知できたとしても、それが何であるかを確実に識別できなければ、分かったことにはならない。知っているとは、その物事を「ことば」によって切り取れること。つまり「語」を知っていることだ。

たとえば「ニート」という語がある。この語の出現獲得により、人は「ニート」が理解できるようになった。もちろん「ニート」はそれまで全く存在しなかったわけではないし、そのような存在も全く知られなかったわけではあるまい。しかし「ことば」によって切り取られることにより、明確に意識できるようになる。この明確な認識が、分かった状態だ。そしてそれは「ニート」という「語」なしにはあり得ない。

3「対立」による「弁別」
――言語学的思考法――

今が「幸せ」だと言えるのは、「幸せ」という「語」を知っているからである。そしてさらに、ここが極めて重要なのだが、その状態が「幸せ」だと分かるのは、「不幸せ」を知っているからである。

常に「幸せ」だと、それは日常かつ当然の「常態」になってしまい、「幸せ」という概念は無意味化し、語そのものの存在意義が消えてしまう。

言語学では、対(ミニマルペアー)をつくり、その差異に注目し、その特徴(素性)に「対立」を見出し、二つが「弁別」できるとする。すなわち言語学では、ある人を美人やイケメンだと認識できるのは、美人やイケメンではない人がいるからだと考えるのである。

さらに言うなら、美人やイケメンの方が少ないために「希少性」が生じる。そうなると皆がそこに向かって集中するインセンティブが生じ、「価値」が高まる。この「希少性」以下は経済学の考え方だ。

以上のような物事をとらえるモデルを形成獲得するのが、君たちが大学で学問を学ぶ意義である。

4「ことば」、それが君の世界だ!

『我語りて世界あり』という神林長平の小説がある。題名は、もちろんデカルトの「我思う、ゆえに我あり」をもじったものだ。「我語りて世界あり」とは、語った分だけ世界が存在する、ということである。「ことば」によって語り得る範囲、それが「世界」である。

たとえば幼稚園児に「大きくなったら何になりたい」と聞く。すると(幼稚園の)先生、おもちゃ屋さん、ケーキ屋さん、お花屋さんなどなど、さまざまな夢のある答えが返ってくるであろう。しかし、その答えには税理士や公認会計士といったものは決して表れない。これは自分の認識世界からしか、人が答えを導き出せないことを意味している。もし税理士や公認会計士といった答えが返ってくるとしたら、それはその子の両親など身近に、税理士や公認会計士をなりわいとする人が存在することを意味する。

語彙が豊富、すなわち知識が多い。語彙が豊富、すなわち日本語力(=言語能力)が高い。語彙が豊富、すなわち思考能力が優れている。このようにつながって行くわけだ。

どうかな、とても怖いことだとは思わないかな。キレイなものは何でも「カワイイ」、キライなものは何でも「きもイ」、イヤなことは何でも「うざイ」、……、何と出会ってもそうとしか表現できず、ほかに「ことば」が出てこないとしたら、君はなにごとも微妙な違いがまったく認識できていないということサ。

5 読んでみよう

ここで紹介した考え方は「構造主義」と呼ばれる。「構造主義」は、言語学者ソシュールにその起源を持つ。その後、言語学にとどまらず、レヴィ・ストロース、メルロ・ポンティ、ジャック・ラカン、ジャック・デリダらへとつながって行く。

次の二著などで是非とも入門して欲しい。

○橋爪大三郎
『はじめての構造主義』
講談社現代新書

○加賀野井秀一
『20世紀言語学入門　現代思想の原点』
講談社現代新書

さらに根源から学びたい人には、デカルトの『方法序説』(岩波文庫他)をまずお勧めする。読み通すのが難しければ、第2部の4規則だけでも必読だ。

MASAKI TAKAMATSU
経済学部教授
専門は日本語学・言語学。「日本語概説」「日本語研究」「文章表現Ⅰ・Ⅱ」「論文作法Ⅰ・Ⅱ」を担当。「新選組」と「白虎隊」を愛する。尊敬する人物は「榎本武揚」「土方歳三」ら多数。嫌いなものは「薩摩と長州」。誓いの言葉は「臥薪嘗胆」。入場テーマ曲:「アイ・オブ・ザ・タイガー(サバイバー)」&「ターミネーターのテーマ」